



Newsletter No.74

2017年9月10日

発行 レイバーネット日本

〒173-0036 東京都板橋区向原 2-22-17-108

http://www.labornetjp.org

labor-staff@labornetjp.org

電話 03-3530-8588 FAX 03-3530-8578

「戦争反対、労働者の権利」の声あげよう ～大成功だったレイバー映画祭 2017～

「さまざまな映画祭がありますが、こんなに力のこもったドキュメント映画を見たことはありません」「若い人たちの参加、作品があって良かったです」「どの作品も非常によかったです。大きなメディアでは、扱われないテーマだったと思いますが、とても大事なことを伝えてくれていました」「のほほんとして過ごしている自分にカツがはいたような感じでした」「勇気と活力をいただいた思いです」。これは今年7月22日のレイバー映画祭に寄せられたアンケートの声だ。

例年好評の映画祭だが今年は質量ともに「グレードアップ」した感があった。メインの『標的の島～風かたか』以外の制作者のほとんどはレイバーネット会員で、いわば自前の映画運動が確実に広がっていた。3分ビデオから始めた人が短編・中編をつくるようになった。共通しているのは、いまの社会の現実を映像を通して伝え、変えていきたいというアクチュアルな姿勢なのだろう。映画祭は300人の参加で二次会三次会まで盛り上がったが、こうした流れをより発展させていきたい。

マスコミの中にも動きがみえている。おりしも8月のNHKテレビは「戦慄の記録 インパール」や「731部隊の真実」など優れたドキュメンタリーを何本も連発し、NHK良心派の健在ぶりをみせた。こんな番組を毎月やってくれれば日本の劣化を少しは止めることができるのと思う。菅官房長官の欺瞞を追いつめる東京新聞・望月衣塑子記者の活躍もある。「残業代ゼロ法」の連合容認もぎりぎりのところでストップさせた。安倍政権の綻びが始まり各所でせめぎ合いが続いている。

8月末には、北朝鮮ミサイル発射の「Jアラート騒動」で一瞬にして日本社会が「準戦時体制」になってしまう危険な状況を目の当たりにした。「国民を戦争に参加させるのは簡単なことだ。自分た



ちが外国から攻撃されていると説明するだけでいい。そして平和主義者については、彼らは愛国心がなく国家を危険に晒す人々だと非難すればいい」というナチスの手口が思い浮かぶ。こんなやり口に騙されてはならない。

2017年秋はふんばりどき。さまざまな行動が予定されている。私たちはレイバーネットの活動を通して「戦争反対」「労働者の権利擁護」「憲法守れ」の声をしっかり上げていきたいと思う。(M)

レイバーネット・2017秋のスケジュール

●レイバーネット TV の予定

2017年後期は9月～11月の間に6回放送予定です。1回目の123号放送は、9月12日(火)午後8時～9時で、レイバーネットTV夜生スペシャル「とことん討論!北朝鮮核ミサイル問題」をお送りします。出演者は、太田昌国・小倉利丸・平井玄・安田幸弘で、司会は根岸恵子・稲垣豊の各氏。いま焦眉の問題を真正面から取り上げます。政府マスコミ報道から見えてこない問題の本質に迫ります。ぜひご覧ください。9/24(水)、10/11(水)、10/25(水)、11/8(水)、11/22(水)「本の発見」と続きます。

●9月14日(木)川柳班合宿

9月14日(木)、反戦川柳人・鶴彬の命日にあわせて、大阪で「獄死80年 顕彰碑建立10周年」のイベントがあり、川柳班も大挙して参加し、現地で合宿する予定です。関心のある方は事務局まで。

●レイバーフェスタは12月16日(土)

ことしのレイバーフェスタは12月16日(土)田町交通ビル6Fホールで行います。3分ビデオも募集しますので、いまから準備をお願いします。

*きびしい財政状況が続いています。会費納入・カンパを引き続きよろしく。

●映画祭レポート（週刊金曜日）

当事者の声と目線で“今日性”増す「レイバー映画祭」

岩本太郎

年1回恒例「レイバー映画祭」(主催・レイバーネット日本)が今年も7月22日に東京・田町で開催され、約300人(主催者発表)が参加した。

映像制作やネットでの発信を通じて、さまざまな社会問題について考える有志ネットワークが行なう同映画祭も今年で11回目。労働問題を中心にマスメディアが普段なかなか取り上げないテーマを、その現場当事者、あるいはそのすぐ隣りにいる市民の目線で報じる姿勢は、近年では回を追うごとに今日性を増してきているようにも見える。

武蔵大学の永田浩三教授(元NHKプロデューサー)のゼミ生が福島県浪江町で取材した『アスベスト 震災後のさらなる恐怖』(12分)、恵泉女学園大学の卒業生たちが沖縄や濟州島、台湾における苛烈な歴史を追った『私たちのフィールドスタディ』(24分)といった若者たちによる作品が上映されるなど、新たな世代が加わってきた頼もしさを感じさせた。一方、三上智恵監督の『標的の島 風かたか』(119分)、松原明さんと佐々木有美さんが韓国に進出した日本企業の労使問題を追った『トゥージェン! 韓国サンケン労組は行く』(30分)、共謀罪法案に反対する創価学会員などの姿を描いた湯本雅典さんの『共謀罪が通った日、「前夜」がやってきた』(20分)などお馴染みのメンバーによる作品も。

そうした力作ぞろいの中でもひととき注目を集めたのが堀切さとみさんの『原発の町を追われて3』

(26分)だ。さいたま市で給食調理員を務める堀切さんは、6年前、福島県双葉町から埼玉まで避難してきた原発被災者の支援活動に携わって以来、映像取材を継続中だ。4年ぶりの新作となる今回は双葉町出身の鶴沼久江さんが主人公。鶴沼さんは故郷での牛飼いの仕事を失い、先頃、夫とは死別した。避難先の埼玉では農作業に従事しつつ懸命に暮らす鶴沼さんは、上映後、堀切さんとともにゲストで登壇。「二つ目の双葉町」を作らないでほしい。原発がある限り、いつ再びこういう状況があるかわかりません」と悲痛な面持ちで訴えた。

歳月を経ていく中で人々の記憶から忘れ去られようとしている悲劇が、なおも現在進行中であることを当事者の肉声によって強烈に突きつけてくる一瞬。それはまさにレイバー映画祭の真骨頂ともいべき場面でもあり、この映画祭がここまで続いてきた理由を再認識させられた気もした次第だ。(「週刊金曜日」7月28日号より)

*現在、岩本太郎さんは初めての単独著作『炎上! 100円ライター始末記』を準備中。クラウド・ファンディングもしている。内容はかれの弁によれば「岩本の“自叙伝”。今から約30年前、『昭和』の最後の頃に何もわからず東京まで出てきた若造が、いかなる経緯から出版業界に迷い込み、そしてフリーランスの物書きになったかを本人自身が綴るといふ、いかにも売れそうもない(汗)内容」とのことです。

●激しく揺さぶる映画『原発の町を追われて3』

レイバー映画祭から自主上映がひろがる

堀切さとみ(制作者)



この夏、念願叶って『原発の町を追われて3』を7月22日のレイバー映画祭で上映することができた。一作目を発表したのが2012年。3.11のショックが冷めない頃で人々の関心は高く(給食調理員が映画を作ったというのも話題になって)全国で自主上映会が広がった。しかしその後、政府が進めたことはオリンピックの東京誘致、原発再稼働と海外輸出、事故前の20倍に及ぶ放射線量の地域へ住民を帰還させることだった。

私は、埼玉に集団避難した双葉町民を定点観測しながら、なかったことにされようとしている原発事

故と避難者のことを伝える機会を窺っていた。センセーショナルな出来事がない中、牛飼いだった鶴沼久江さんと出会った。彼女のインタビューや農作業の様子を編集しながら、涙したことは一度や二度ではない。私自身職場のことで悩んでいて、彼女の生きる姿から得るものは大きかった。

映画祭当日、上映中に会場のあちこちからすすり泣きが聞こえた。福島県中通りから観に来た人が「被曝地帯で孤立しながら生きる自分を、激しく揺さぶる映画だった」と感想を寄せてくださった。一、二作目を観た人が「今回の(三作目)が一番良かった」と言ってくれたのも嬉しかった。6年の歳月は人々から事故の記憶を消し去っていくが、それに抗い続ける人の営みはきちんと伝わったと思う。

8月6日には、レイバー映画祭で観てくれた人が「日頃ドキュメンタリーとは縁のない人にも観てもらおう」とチラシをポスティングし、居酒屋&ギャラリーでの上映会も実現した。9月16日(土)には「福島映像祭2017」(ポレポレ東中野)でも上映される。1部から3部まで一挙上映の企画もあるので、よろしかったらぜひ足を運んでください。

*写真:堀切さん(左)と鶴沼さん(右)

太田昌国さんのコラム「サザンクロス」がスタート

5月のレイバーネットTV「死刑制度を考える」のゲストに太田昌国さんが出演した。太田さんとは、数十年前に南米ボリビアの映画制作グループ「ウカマウ集団」の映画上映でお世話になってからの付き合いだ。恒例の終了後の懇親会で話が盛り上がり、レイバーネットにコラムを書いていただくことに。さて、コラムのタイトルをどうしよう。太田さんは、言わずと知れた南北問題や民族問題の専門家。特にラテンアメリカのイメージが濃い。だからその雰囲気のタイトルがほしかった。わたしが考えたのは「エル プエブロ」（人民）、これだけではなんなので、会員の志真秀弘さんに相談すると「サザンクロス」（南十字星）という案を出し



てくれた。太田さんに相談した結果「サザンクロス」に決定。ロゴも高幣さんをお願いして、サザンクロスがきらめく美しいロゴになった。7月10日から連載開始。1回目「20世紀以降の歴史的逆流の只中で」、2回目「「反日的な」歴史教科書への攻撃」、3回目「21世紀初頭の9月に起こったふたつの出来事」と、日本で世界で、今、最も重要な事柄に切り込んだ内容だ。当初は月1回の予定だったが、8月からは2回（10日、25日掲載）に変更。今後どうぞご期待ください。（佐々木有美）

若者も加わった〈レイバーブッククラブ〉

週刊書評、レイバーネットTV企画の充実へ

8月5日都内で〈レイバーネットTV・本の発見〉スタッフと〈週刊・本の発見〉執筆者が集まりました。前半は、〈レイバーブッククラブ〉第1回として、『朝鮮短編小説選 上』（岩波文庫）の「洛東河」を取り上げて議論。朝鮮文学、特にプロレタリア文学は、はじめて読む人がほとんどで、それぞれの感想が活発に話された。若いスタッフのSさんの報告も歴史的に作品を位置づけていてよかった。次回は、10月17日に『対談 沖縄を生きるということ』（岩波現代全書）を取り上げます。

後半は、各書評執筆者（大西赤人・菊池恵介・渡辺照子・佐々木有美・志真秀弘）から、反省と抱負が語られ、ネットでの反響も広がっていることが紹

介された。さらに、第5木曜日にも新人筆者が担当することになり（8月31日掲載済）、完全週刊化ができた。取り上げる本に各人の特徴があり、ほとんど分野が重ならないのがよい。あらかじめ、調整することなどまったくしていない。これからも、20歳代の執筆者が加わったことでさらに広い分野の書評が期待できる。

〈レイバーブッククラブ〉の出発により、彫の深い批評も可能になる。それらは、次回〈レイバーネットTV・本の発見〉シリーズの企画にも反映されるはずだ。次回TVは11月22日（水）で、昨年末同様、「2017 私の1冊」を予定している。アンケートへの回答をお願いします。（志真秀弘）

木下昌明の新刊『ペンとカメラ』



さっそく読んだ。木下昌明の根底は「時代と生きる」と言ってもいいかもしれない。権力と手を結び、権威にひれ伏すことでは生きるとはいえない。社会の底辺に生きざるを得ない人々へのあふれんばかりのあたたかな眼差し。矛盾に満ちた煉獄とも言うべきこの世への鋭く突き刺さる眼。

映画は一貫してこうした視点で鍛えた眼力によって選択されている。そして、総合芸術たる映画を多面的に伝える優れた文章技術によって、是非観ようという気に必ずさせる。そんな意味で、この

本を読むと本当に映画と言う芸術のすばらしさ、その価値が良くわかる。（フクシマ陽太郎）

→1800円 レイバーネット事務局で取扱い中。



レイバー映画祭には「韓国サンケン労組」も参加し、交流した。

話題のウェブサイト記事から

レイバーネットウェブサイトに掲載された記事・写真・動画はいろんな形で広がり、活用されています。ここではフェイスブック「おすすめ」の数字が1000を超えるなど話題になった記事（リードのみ）を3つ紹介します。ウェブサイトはみんなでつくるメディアです。ぜひ記事・写真・動画をお寄せください。（編集部）

●「武器では平和は守れない」～埼玉の中村哲講演会に1450人



8月25日、中村哲医師「命の水と緑の大地を拓いて34年・戦乱と早魃のアフガニスタンから『平和』を考える」講演会

が、埼玉会館大ホールに1450人が参加し大盛況だった。ハンセン病治療のためパキスタン北西部ペシャワールに赴任以来34年、アフガニスタン東部で、医療活動のかたわら1600本の井戸を掘り、相次ぐ戦乱と早魃で難民化して人々の帰還のために灌漑用水を拓いて「緑の大地計画」を進める中村哲医師は、政治と自然の変化に翻弄されてきた人々がひたすら求める「平和な生活」への願い、「豊かさ」とは何かを一緒に考えたい、と次のように講演した。「中近東の西にある山の国アフガニスタンは人口3000万の保守的イスラム教の多民族雑居国家で、アフガン戦争以前は遊牧と農業中心の需給率100パーセントの国だった。降水量は少ないがヒンズークシ山脈の雪や氷河が溶けて土地を潤し、降り注ぐ日差しのおかげで光合成が促進し豊かな耕地となり糖度の高い野菜や果物がとれ、小さな国の集合体のようなこの国は、互いの民族を尊重しながら、平和な民族の花束とも呼ばれてきた」。(ジョニーH)

●「基地がなくなれば 天国に行ける」～カッコよかった“文子おばあ”

文子おばあ語録。「アメリカが勝ったから、私は生きている」「基地がなくなれば、天国に行ける」「沖縄に基地がなくなれば、日本中になくなる」。8月17日夕方、参議院会館講堂で「島袋文子おばあを迎え沖縄に連帯する市民の集い」が開かれ500人が集まった。映画『標的の島 風かたか』の監督三上智恵さんが聞き手だった。会場の講堂はあふれ、別会場も満杯になる中で、初めて上京した島袋文

子おばあ(88歳)のお話を聞いた。たった30分だったが、内容は濃かったし、全身で安倍政権に対する怒りをほとぼしらせ、戦争はしてはならないというメッセージを私たちに送ってくれた。講演後は官邸前の抗議行動。車椅子で官邸前に現れた島袋文子おばあは、渾身の力を込めてアベに呼びかけた。「安倍さん、安倍さんに手紙を託した島袋文子です」。続けて「あなたは美しい日本をつくると言っているけれど、戦争のできる国をつくろうとしているじゃあないですか」と。あまりにカッコよく、力強い文子おばあ。思わず「私も頑張る」と叫んでいた。(笠原真弓)



●大阪で「相模原施設障害者大虐殺追悼アクション」～事件から一年

神奈川県相模原市にある津久井やまゆり園に元職員

の男が押し入り、19人の障害者を殺害した事件から1年経った7月26日、大阪・梅田ヨドバシカメラ前で、「相模原施設障害者大虐殺追悼アクション」が行われ、約250名が参加した。



昨年、追悼アクションを開催した有志が呼びかけ人となり、未だ実名報道もされていない亡くなられた19人の被害者に追悼の意を表すとともに、この事件を風化させてはならないと訴えた。「わたしは7月26日に殺された19人のひとりだ」と書かれた横断幕を掲げ、車椅子に乗った人々がズラリと並ぶ様子に、道行く人々は思わず足を止め、スピーチに耳を傾けていた。はじめに主催者の1人である、劇団態変主宰の金満里さんが、自らも施設での暮らしを経験した1人として、この事件を我がこととして受け止めた恐怖と、被害者の実名報道を行わないことの問題性について語った。(大椿裕子)

レイバーネット日本の会員になりませんか

会員になれば、自分でニュースやイベント、お知らせを提供できます。レイバーネット日本は組合や個人が全国にアピールできる絶好の場所です。

年会費 3,000円
(B会員 = 5,000円 通常 + TVサポート)

現会員数 556名
ウェブアクセス 1日 6,000
郵便振替 00150-2-607244 レイバーネット日本
銀行口座 東京都民銀行 小竹向原出張所
普通 5002960
入会申込用アドレス apply@labornet.jp.org
電話 03-3530-8588 ファクス 03-3530-8578